

## 小倉百人一首百首を讀みて

加藤淳平

小倉百人一首に撰集せられたる百首を讀みて、撰者藤原定家が執念の印象強し。

定家は、藤原氏道長が子孫たる御子左家に生まれ、父藤原俊成を繼ぎて、歌道と歌學の第一人者たり。日本最高の古典學者の一人にして、定家が廣く深き古典の素養と學識は、世の敬意を集む。後鳥羽上皇の強き御意向に基つき、『新古今和歌集』の撰進せられし時、定家は、年長の從兄なる藤原家隆と共に、新古今集の主要なる撰者となりて、上皇の御寵愛をほしいままにせり。

されど定家、學識に類ふ者無けれど、性格は複雑にして圭角多く、また自らの官位の昇進等の些事にちまちまと氣を遣ふ小人物の一面あり。上皇の豪宕にして、おほらかなる御人柄に追隨すべくも非ず。上皇の、「ほのぼのと春こそ空に來にけらし天の香久山霞たなびく」、「見わたせば山もと霞む水無瀬川夕べは秋と何思ひけむ」等の大いなる風格の御歌を、定家が精緻を盡したる技巧の歌と比べば、そは明らかならむ。秀歌を産むに苦吟し、骨身を削る苦心を重ねるを常とせる定家は、技巧を超越したる上皇の御歌に及ばざるを覺えたるべし。

新古今集の完成を見たる後、上皇に、定家が複雑なる性格を疎んぜらるる御氣持の生じ、また定家も、上皇が政治的御活動に批判的なりしたため、上皇が寵を失ひつるを感じたるらむ。されど定家が上皇に對する崇敬と敬慕の念は、終生變ることなし。

小倉百人一首に、定家が後鳥羽上皇に對し奉る思慕の表れを見たる數多の推論、臆説、世に行はる。曰く、小倉百人一首の選歌、構成、上皇が水無瀬離宮の場景を表す、曰く、定家が歌の「來ぬ人を待つ」は、後鳥羽上皇の隱岐よりの御歸還を待つを示唆す、曰く、百人一首第二番の持統天皇が香具山の御歌は、後鳥羽上皇の香久山の御歌を想定したるなり、云々。これらが當否、我は得知らず。

されど小倉百人一首が撰歌と構成に、今は狂瀾を既倒に廻らす能はざる王朝の華麗なる文化への定家が哀惜の思ひと、無謀にもそが全的復活を謀り給ひし後鳥羽上皇への共感と崇敬の念の窺ふるは、多くの人の覺知したるところにこそあらめ。定家の、百人一首の掉尾を、後鳥羽上皇の「世への思ひ」と順徳上皇の「しのびてあまりある昔」の御歌もて飾りたる、渠が深き存念の表出なるらむ。

後鳥羽上皇、恐らく史上最高の歌人天皇にして、藤原定家は、史上最高の歌學者・古典學者なるべし。さてこそ後鳥羽上皇と藤原定家の君臣一如の協力の賜物にして、今に残る日本和歌史上最高の古典の一つ、新古今集世に出て、長く和歌のみならず、我が國人の文化と美意識全般の規準となりしはむべなれ。

古今集以來の敕撰集、私家集はもとより、當時未だ廣くは讀まれざりし萬葉集にも親しみ、飛鳥、平城京の時代より平安王朝期を経て、鎌倉時代に至る和歌全般に通曉せる定家、承久の世に、皇室の權威の關東武士の力に敢へなく屈しつるを見たり。

されば定家が、姻戚なる關東武士、宇都宮賴綱のため、小倉百人一首を撰歌、編纂したるは、歴史の不可逆なるを知り、萬葉集以來の我が國文化の精華と、それを再興せしめんと

の徒なる御企てに頓挫し給へる後鳥羽上皇の御偉業を、此の國の後代に遺さんためならずして何ぞや。

かくて定家が後鳥羽上皇への、片想ひにも似たる思慕の發露たる小倉百人一首、長く日本人が文學的鑑賞と遊戯に親しむ所となり、廣く我らが文化的、文學的素養の基礎たり。そは日本の文化の傳承にとり、悦ばしきことなりしに非ずや。

(平成二十八年九月二十六日受附)